

軒昂会

軒昂会会報 第12号
発行者 日原 雄
編集者 田村千秋
発行日 平成11年9月
発行 年3回発行
http://www.d1.dion.ne.jp/kekokai/index.htm

会報は年3回を予定しています。
皆様の原稿お待ちしております。
頂いた方にはお礼を申し上げます。
原稿の送り先
秦野市渋沢 3-2-7 〒259-1322
FAX: 0463-88-2967
E-Mail: c-tamura@bd5.so-net.ne.jp
田村千秋

シルクロード

ここ10数年間女房と2人で夏休み等を利用して中国側からのシルクロードを歩いた中から「観光ガイド」には載っていない事柄をお伝えします。

西安

西安(昔の長安)ここではイスラム系の人々もおりますほとんどが漢民族の人々です従って儒教が多いようです市街地の中心部は唯一現存する泥ともち米で作った城壁に囲まれた古い都です秦皇皇帝の中国統一発祥の地で唐の時代までの首都です。市のシンボルは城壁と7層の大雁塔で中国初の有料高速道路を通って郊外に出ますと有名な兵馬俑博物館や玄宗皇帝と楊貴妃のスイートホームであった華清池や秦始皇帝の墓跡(盗掘され原型なし)などがあり又この当たりは漢方薬の原料のザク口の鼠が一面にある。

小日向さまにシルクロード紀行をシリーズでお願いしました。尚詳しい写真入りのものを軒昂会のホームページで紹介しています。

小日向 啓治

敦煌

西安から飛行機で、時間半ほど離れた砂漠の中のアラモス都市で砂漠といってもこの当たりはゴビ(小石がゴロゴロとした荒地)でタクマラカン砂漠の一部ですが中央部とは様子が違います。敦煌といえは有名な莫高窟(横穴式仏教式窟壁画)彫刻が断崖の横穴の小部屋に描かれていて(写真)シルクロード交易が盛んなころ敦煌を通して商隊が旅の安全を祈って4、14世紀の間に奉納したと教壇近くにある莫高窟以外の壁画も幾つか見ましたがほとんど盗掘で無残な姿でした30分ほど車で行った砂漠の中に西天敏行の映画「敦煌」の野外セットがあります。

余談ですがどこでも同じですが困るのは公衆トイレです。二イハオトイレは慣れていますがその汚れ具合は何とも言葉になりません。このことはシリーズの終わりまで続きます。次回からはトルファン、ウルムチ、ホータン、ヤルカンド、カシユガルと進みます。



第27回軒昂会ゴルフコンス

優勝 古谷理宇
準優勝 勝保清次
三位 本間 茂

今回は軒昂会が発足して最低の参加でした。(九名)パーティーの席で今後軒昂会として、ゴルフ参加者を集める事が出来るかと討議した結果、会費が高いと言った意見があり次回より五千円を三千円にすることが決まりました。会員各位の考えはあると思いますがまとめ役として申し上げます。年間行事計画で会報にも報告の通りで予定が立つのでは無いかなと思います。今後はゴルフがまともな言い方できるかと不安感でいっぱいですが、各会員が軒昂会という意義を充分ご理解をして戴きたいですね。

軒昂会会員だより

軒昂会会員数 八十三名
平成十一年度新会員 一名
平成十一年度新会員募集中心

お知らせ

軒昂会ではリサイクル品の有効利用の一環として、不要になった物を出してもいいリストを作成し欲しい人に提供する、ことを始めています。

お願い

平成十一年度軒昂会年会費二千円会計までお願いいたします。

AMTだより

皆様が大いに利用したアマダクラブが駐車場に变身しました。(左写真)平成十二年四月よりアマダメトレックスはアマダと合併したアマダソノイキはアマダワシノと合併します。そのため今後の軒昂会運営について新年会で審議したいと考えています。事務局



訃報

さる九月七日新藤特別顧問が逝去されました。ご冥福をお祈りします。

第七回 心のふれあいの大さき

桜田忠男

街道史跡の原型を留める保存を東海道五十三次を歩いていると見えてわかることですが、現在の三重県には当時の街道史跡が原型に近い形でいくつも残っています。

街道の分岐点にある追分遺跡は四日市宿のずれにある日永の追分は五十三次随一のものだと思えます。東海道と伊勢参宮道との分岐道に建つこの追分史跡は東海道を旅する旅人達の伊勢参宮道場所をも兼ねていて、我々日本人は伊勢神宮に対しては精神的に深い思い入れを持っているので、今でもそこに立って遙か神宮を遥拝すると、道中何かと不安がちになる旅の気分が安らぐのを覚えます。

一里塚では亀山宿と開宿の間にある野村一里塚跡が原型のまま保存されており、これを見るとこれまでの街道の所々にあった一里塚跡は何であったかと思つほど素晴らしいもので本物を見た喜びを味わうことが出来ます。宿場の中で最も当時の面影をそのまま残しているのは伊勢の国の開宿だと思えます。この町に一歩足を踏み入ると一気になんかタイムスリップした気持ちになります。

なぜ伊勢の国(現在の三重県)にはこのように五十三次の史跡が原型を留めて残っているのでしょうか、それは交通網の開発と密接な関係があるようです。東海道新幹線も名神高速道路もこの地域を迂回して通っています。我々や開を通る鉄道は関西本線だけそれも本線とは名ばかりでダイヤは日中は1時間に1本の割合で便利だとは思えません。

即ち急速に交通網の開発がなされた地域に昔の街道史跡が大切に残されています。今後は後継の世代に引き継いで行くためには交通網の開発との良きバランスを考えて行かねばと考へてきます。

五十三次の伊勢路への旅は当時熱田(宮宿)から海路を桑名に渡りました。現在の伊勢路にはこのルートはありませんが、我々は熱田から木曾三川を越えて桑名へ、更に四日市を経て鈴鹿峠下の坂下宿までの73キロメートルを歩き通しました。

ここに7つの宿場があり前記の一見に値する街道史跡があります。通算3日を通じたので一日当りの歩行距離は24キロメートルになります。尚、この区間は効率を考え1泊2日、2回のスケジュールにて歩行しました。



編集後記

本年3月 Web発信しました軒昂会ホームページ、アクセス回数が500を超えました。安藤隆夫会員の「私の趣味」を会員のHPに加えました。会報の原稿お寄せ下さい。